



日本海

永年記録の価値再確認

山口正男

本邦第二の大湖沼、干拓問題で話題の八郎潟は、元来棲息魚族が豊富であり、秋田県民の魚蛋白の主要な供給源である。最も要種としてワカサギ、ゴリ、シラウオ、フナがあり、それに次いで約200種の主たる魚種がある。

元村博士の生物群集構成に関する等比級数法則は元来群集に於ける種数とその種の個体數間に於けるものであるが、この関係は最近東京水大の吉原教官の発表にもあるごとく、重量でも適用出来るようであり、八郎潟の主要水産物の年間漁獲量にもこの法則がよくあてはまる。

ところが年によつて漁獲量に変動があり、潟の正常な魚種の漁獲順位を破り、四重要魚種の中でもことにワカサギが減產し、反対にスズキの様な海産魚が意外な漁獲を上げることがある。この現象について

は古い秋田水試の記録にも注目される。最近では日本海区水産研究所の加藤部長も強調している。換言すると、八郎潟にとっていわゆる不漁年はワカサギの年漁獲が十万貫台を超えていないし、海棲を主とする魚類、ことに肉食性魚類の漁獲量が増加して年漁獲魚種順位の上位を占めていることである。この肉食性魚類の増加と生産量との関係のことはすでに花岡博士の水産資源に於けるコンミニティの問題に於て論ぜられている通りであり、八郎潟のような開放湖沼の場合これら海産肉食魚類による入水量の多寡を支配する大きな要因となる。この推測を容易ならしめてくれるものには、色々な理由で中断されながらも記録されていた長年の八郎潟の調査記録であつた。

結局八郎潟の魚種組成均衡の順列を取り、ワカサギ等の不漁をまねく大きな原因が、この潟に流入する海水の程度の強弱に一原因があるように見られたし、これがスズキ等の肉食性の海産魚の入湖棲息を支配し、一方ではスズキによるワカサギの食害、ワカサギの発生環境、棲息数、餌料発生源の変動から成長を支配しているごとくみられた。

こんなことから推察の一つの指向性がつかめたのも、元村、花岡両博士の研究の結果があつたからである事は勿論であるが、丹念に記録の作成とその保存が重要鍵となつていることはいうまでもない。

水産の対象となる水族も畢竟水中社会の一構成者である以上、それは単独に取扱い研究されるものでないことは勿論であり、

(秋田県水試技師)

今春の山形県イワシ漁況予報を回顧して

菅野嘉彦

漁業者A 「今年のイワシはひどい不漁だつたね」

試験場員B 「全くひどい。

何しろ総漁獲がたつた二十三万貫だ。昭和二十一年、二十二年は各々十万貫、二十万貫

の水揚で今年よりも劣つていいが、漁業資材の無かつた時だから比較するのは無理だし、今年の漁獲は実質的には戦後最低の記録だらう。」

漁A 「今年のイワシ漁も悪かったが、いつも四月始めに水試で発表する、何といつたものは、色々な理由で中断されながらも

報とかいうやつ、あれもあり良くなかった。

主なる項目 第67号

- 永年記録の価値再確認 山口正男
- 今春のイワシ漁況予報を顧り見て 菅野嘉彦
- 人々の世界 菅野喜隆
- 漁村青年夏期大学開催 藤本義一
- 第五十三回研究談話会開催
- 昭和三十一年度科学的研究費配分きまる 山中

群衆体変動として日本海の水族の生産を取扱い、漁況を、資源を云々すべきで、この方向に各種研究の進行の根底があるとみて日を思い、長年の自然現象の変転の正しい科学的な記録を残すべきであろう。自然界の生物興亡の輪廻を明かにすると思う。

当らなかつたぢやないか。」

試B「そういわれると一言もないが、漁期が遅れたことや低い水温が恢復するかどうかで豊凶が決まる。といった予想は当つていたろう。」

漁A「いや、それもあまり感心しない、低い水温が早く上るかどうかで豊凶が決まるなんていう予想が当つたところで何にもならないんで、その低い水温が早く上るのかが上らないのか、つまり豊漁なのか凶漁なのが大切なんだ。結局、今年の予想で本当に役に立つたのは、漁期が十日ほど遅れるということだけだね。」

試B「いや、こつびどくやられるね。我々だつてもつとしつかりした予報を出したいといつも思つてゐるが、なかなかうまくいかないんだ。」というのは、五月から六月にわたるイワシ漁期の予想をたてる場合、かりに四月にたてるとすれば、少くとも一カ月から二カ月後の海況の変化を予知出来なければならぬが、こいつが非常に難かしい。日本海の各水試が協力して対馬暖流の調査を行つてゐる目的の一つはそれなんだよ。」

漁A「一ヶ月や二ヶ月後の海況もわからんようでは、予報を出すことがそもそも無理じゃないのか。もつとも、我々漁師からみると水試では予報を出す場合に、等温線が動き、そしてどの位獲れるかということがわかるものだろうかと、時々不思議に思うことがよくあるよ。」

イワシの獲れる量や動きにはもつと別のか。

しかももつと重要な原因はないものだらうか。

たとえば今年のイワシは全然油が無くて

まずかつたし、五月中旬から下旬にかけ

て、いくら成熟が遅くっていてもとくに

陸に寄つて卵を産まなければならぬ筈の

ものが、どうして庄内浜を素通りしてしまつたのか。このようなことは潮流だけでは

うまく説明出来ないと思われるんで、何か

海流以外のもの、つまり何といつたらい

かどうもうまく言い現せないんだが。」

試B「つまり資源とか生態とか、そい

う方向からも予報を考えるべきだといふん

だらう。」

漁A「まあ、そんなところだな」

試B「これから力を注いでいこう、と考

えているところだ。特に今年のようないワ

シが小群に分散した場合には、魚群の動き

を海況によつて判断することはほとんど不

可能だということを痛感している。」

漁A「その他、日水研のよう広い立場

から出す予報を、そのまま鶴春にして発表

しないで山形県独自の立場から予報を出す

こと、試験船をもつと活躍させることな

ど、いろいろ注文があるが、今日はこの位にしておこう。」

試B「漁況予報も、やがて天氣予報より

当るようにしてみせるから、長い眼で見ていてくれ。じやあ又」

(山形県水試主任技師)

×
×
×
×
×

今年の海況は過去四カ年のそれと比較して新型で、三月一八日出津沖一浬で最低水温は八、三度を示し過去

の九、八より一、五度低く、時間にして約二週間遅れて、

時間にして約二週間遅れて、

現況及び予報としては観測結果から次の現況もあつたようである。

らである。

ここ数年来大
羽いわしの予報

は大体まあまあ
というところだ
と結果をみて感
ずるのである

が、これは能登半島という日本海に突出した地形によるもので、魚群の滞留

る海洋学的な条件とそれに加えて近年大羽いわしの漁具漁法などが、以前より進歩したのに原因していると考えられる。

従来は魚群が

來てるかどうかを判断するため環境要因調査によるより手がなかつたのであるが、魚群探知機が出現するに及んで魚群在否の

直接調査が行わ
れそれにより漁
群来游の状況を
相当具体的に知

魚探人の世界

までも仲々と拡がり難い。また一
身も周囲が皆同じような生活様式
見方、考え方をしていると、外部
覗くと全くどうかと思われるよう
御当人達にとつては、一向当り
しか考えられないものなのである
とは伝統は重んぜられて一種の権
力になつてゐる。改良だとか、革新な
産れる余地がないわけである。外
地からの引揚者などはそこえゆ
くと違う。

ることが出来る
ようになつたこ
とも看過しては
ならないと思
う。

藤本隆一

先ず漁況予報を回顧する前に秋田県の本年のイワシ漁況を通観して見る必要があ
る。

本年の秋田県地先での初漁は、四月二十一日土崎の沖合で一隻が約一〇〇〇尾漁獲したのに始まり、各港で待機していた船が

一齊に出漁し五月中旬には出漁船數二七〇隻に及び盛漁期に入つたが、魚群の散逸連続へ入道崎を境として南部は五月一杯、北部は六月上旬を以つて本年の漁期を終つた。

この間の総漁獲高は、昨年の約六・五割の一六〇〇万尾約四八万貫で、之れは一隻平均約六万尾、金額にして一五万円、漁夫一人当たり手取平均五〇〇〇円と云うみじめさであった。

これは前後約五〇日に亘る重労働に対する報酬としては考えられない金額であり、

船主の側から見ても精細な核算をして見て
黒字の出るものは僅かな船だけであろうと思はれる。

昭和二七、二八年頃いわしの浮上は一日中の若干時であるとの大部分の時間は七、八〇米の海底にあるのではないかとの疑問から日周運動を魚探で調べその結果同一漁場が早朝、昼、薄暮と一日三回使用出来る見通をつけたのであるが、その後三〇年度に到つて本県でも昼獲りが盛んに行われるようになつたのも魚探のもたらした効果であり適温になつたのも次第に効果的に群がありと予報出来たのも魚探のもたらしたものであつて予報もなつたことは事実であるが、今後においては更に科学的なと共に環境要因とその変化を具体的に調査して、大羽いわし漁況予報の向上を期したい。（石川県水産試験場白山丸船長）

今年度秋田県沖合に於ける大羽イワシ漁況予報を回顧して

藤本隆二

先ず漁況予報を回顧する前に秋田県の本年のイワン漁況を通観して見る必要がある。

本年の秋田県地先での初漁は、四月二十七日土崎の沖合で一隻が約一〇〇〇尾漁獲したのに始まり、各港で待機していた船が一齊に出漁し五月中旬には出漁船数二七〇隻に及び盛漁期に入つたが、魚群の散逸運く入道崎を境として南部は五月一杯、北部は六月上旬を以つて本年の漁期を終つた。この間の総漁獲高は、昨年の約六・五割の一六〇〇万尾、約四八万貫で、之れは一隻平均約六万尾、金額にして一五万円、漁夫一人当たり手取平均五〇〇〇円と云うみじめさであつた。

これは前後約五〇日に亘る重労働に対する報酬としては考えられない金額であり、船主の側から見ても精細な決算をして見て黒字の出るものは僅かな船だけであろうと思はれる。

